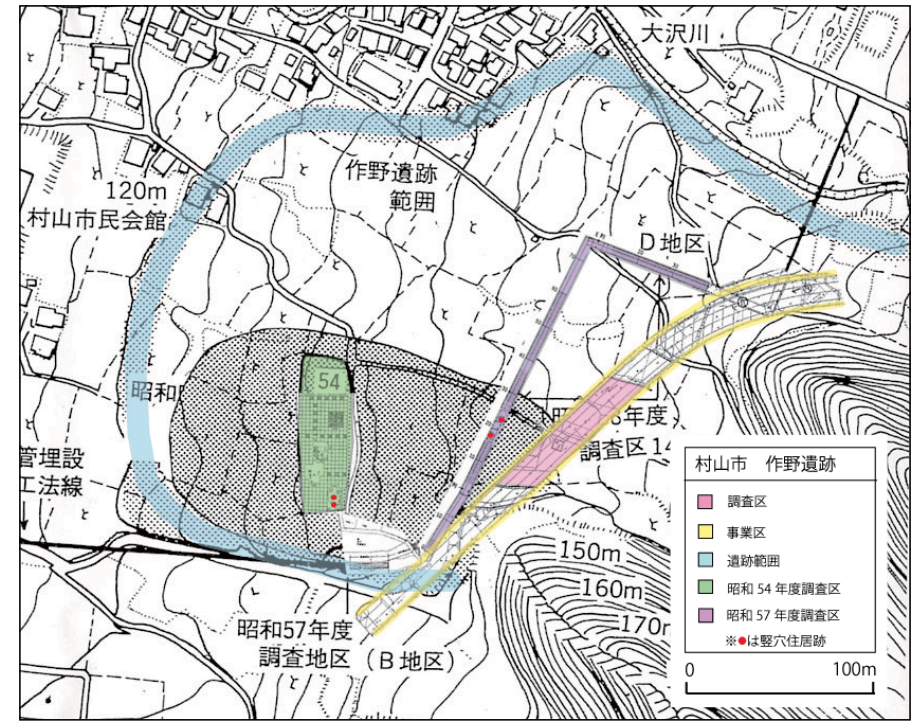
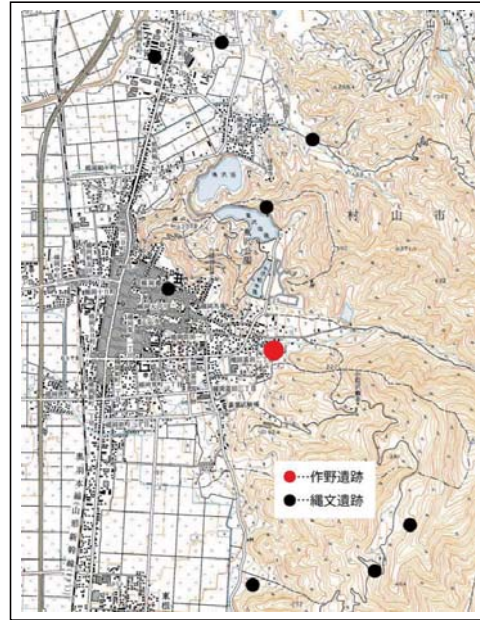


作野遺跡第2次調査説明会資料

2009年7月26日(日)午後2時
財団法人山形県埋蔵文化財センター

調査要項	
遺跡名	作野遺跡
遺跡番号	No.655
所在地	村山市大字楯岡字笛田
調査委託者	村山市
調査原因	徳内・シーボルトライン道路改良事業
調査面積	1,400㎡(長さ87.5m×幅16m)
現地調査	平成21年6月9日～7月29日
遺跡種別	集落跡
時代	縄文時代晩期(約3,000年前)
遺構	竪穴住居跡・貯蔵穴・柱穴・谷跡
遺物	縄文土器・石器・土偶・石棒・装飾品
調査担当者	調査課長 阿部明彦 課長補佐 黒坂雅人 主任調査研究員 植松暁彦(調査主任) 調査員 後藤枝里子
調査協力	村山市教育委員会 村山教育事務所 山形県教育庁文化財保護推進課



遺跡近景(南から)



表土除去作業(重機導入)



面整理事業(遺構検出)



遺構の精査状況

1 遺跡の概要と調査の経緯

作野遺跡は、大沢川左岸の扇状地扇頂部に位置し、地元周辺においては、古くから土器や石器が採集される地域として知られていたところであり、昭和53年(1978年)に正式に県の遺跡として『山形県遺跡地図』に登録されました。

その後、山形大学が、宅地造成などに伴い、昭和54年(1979年)に発掘調査を実施し、竪穴住居跡2棟や多量の遺物を発見しました。

当時県内では、類例が少ない縄文時代の中でも終末期の縄文時代後期末～晩期(約3,000年前)の拠点的な集落跡として報告され、貴重な遺跡として注目されました。

その後、県教育委員会において、昭和57・58年(1982・1983年)に県企業局の送水管工事に伴う調査を行い、竪穴住居跡2棟と、多量の土器さらに石器を廃棄した「捨場」を発掘しました。

特に調査区南端では、縄文時代晩期中葉(約2,500年前)の精巧な土器群がまとまって出土したところから、当時の土器様相を知る上での貴重な資料として、今後大いに活用できるものと期待されるものです。

今回の調査は、国の補助事業でもある村山市の徳内・シーボルトライン道路改良事業に伴う発掘です。調査に先立ち村山市教育委員会が、工事区間を対象として平成20年(2008年)7月に試掘調査を行い、その一部区間で遺構・遺物の良好な遺存状況を認めました。

その後、県教育委員会の指導のもと関係機関で協議した結果、財団法人山形県埋蔵文化財センターが市から委託を受け、平成21年6月9日より作野遺跡第2次発掘調査を実施することになりました。



SG50谷跡の精査(東から)



SK1・2・11大型貯蔵穴の精査(南から)



SG70谷跡の検出(東から)



北区の遺構精査(北から)



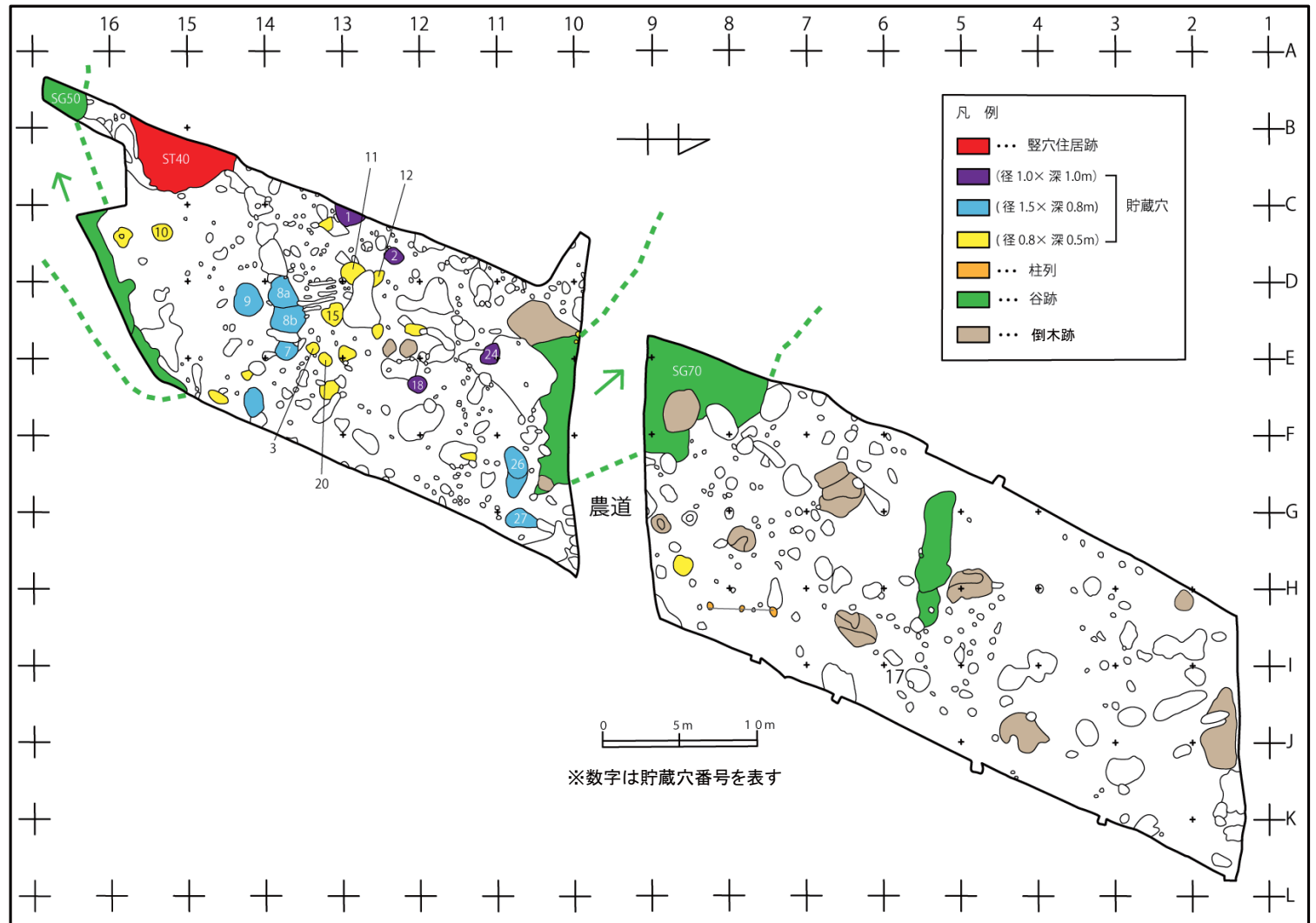
ST40大型竪穴住居跡の上層の遺物出土(西から)



SK3・15・19・20小型貯蔵穴の半截状況(南から)



SK3・15・19・20小型貯蔵穴の精査(南から)



2 検出された遺構

今回の調査区は、昭和57・58年の第1次調査にほぼ並行する約1,400㎡(長さ約87.5m×幅約16m)の範囲です。

調査区は、調査区中央の農道を境に北を北区、南を南区と呼称し、重機による表土除去の後、ジョレンという道具を使い地面を薄く削る面整理を行い、**遺構**(いこう：当時の竪穴住居や貯蔵穴などの昔の構築物の跡)の検出に努めました。

調査では、調査区の南端と中央部で東西方向の**小谷跡(SG)**が発見され、それに挟まれる狭い台地上に**大型の竪穴住居跡(ST40)**や多数の**貯蔵穴群(SK)**が確認されました。

大型竪穴住居跡は、平面が円形で、直径約5m、建て替えがあり、半分は調査区外にあります。住居跡からは、多数の土器や石器が出土し、当時の生活の様子がうかがえます。

貯蔵穴群は、平面が円形で、直径約1～1.5mで、深さは約50～100cmほどを測ります。断面形が下膨れする袋状を呈するものが多く、温度変化が少なく貯蔵に適した地下を上手に利用していたようです。

規模や深さ、形態などから3タイプあり、直径と深さが約1mの寸胴タイプ、直径が約1.5mで深さ50cm前後の広浅タイプ、直径と深さが約50cm前後の小型タイプに分けられます。同タイプの貯蔵穴がまとまって分布していることから、その使用時期や用途の違いが考えられます。なお、貯蔵穴の埋土中から完形の縄文土器が単独に出土し、祭祀などにかかわるものかもしれません。

谷跡は、調査区南端の**SG50谷跡**が約1.5mと深く、石棒など祭祀具も出土しました。調査区中央の**SG70谷跡**は現地形にも名残があり、その形成が縄文時代まで遡ることが分かりました。

3 出土した遺物

竪穴住居跡や貯蔵穴から、当時使われた**遺物**(いぶつ)として多数の縄文土器や石器が出土し、他に土偶や石棒などの祭祀具や、石製品も発見されました。

縄文土器では、深鉢や鉢、浅鉢、壺、急須形の注口土器などが出土しました。これらには、縄を転がした縄文文様のみの土器(**粗製土器**:そせいどぎ)の他に、精巧な磨消手法を用いた縄文時代後期末～晩期(約3,000年前)の東北地方特有の**コブ付土器**、**入組文**、**羊歯(しだ)状文**、**雲形文**、**工字文**と呼ばれる各時期の特徴を示す文様が付いた土器(**精製土器**)があります。

他に、補修孔と考えられる孔を穿ったものや、祭祀用か朱塗りの痕跡があるものも見つかりました。また、関東地方でも出土する広域性のある希少な土器も出土しました。

石器では、石を割って作った剥片(はくへん)石器と、円形や楕円形の石を利用した

礫石器があります。

剥片石器では、主に頁岩(けつがん)という薄く割れる褐色の石材が使われ、動物を狩るのに使った弓矢の**石鏃**(せきぞく:矢じり)や**石槍**(いしやり)、動物の毛皮などに孔をあける**石錐**(いしきり)、加工用の**石篋**(いしべら)、突起が付いた携帯用ナイフといわれる**石匙**(いしさじ)などが出土しました。

礫石器では、木の実などを粉にする粉砕具の**磨石**(すりいし)や**凹石**(くぼみいし)、**石皿**などがあります。

他に祭祀具では、女性を表現し安産や多産を祈ったとされる**土偶**(どぐう)や、男性器を模したとされる**石棒**(せきぼう)も出土しました。

他に石製品で、扁平な石を磨いて、ノコギリ状の刃をつけるもの、**石冠**状のもの、五徳状の足が付く**三角状石製品**なども出土しました。



ST40 竪穴住居跡の床面状況(北東から)



SK2 貯蔵穴の半截状況(南から)



晩期後葉の注口土器の出土状況(ST40)



同時期の蓋と浅鉢高台の出土状況(ST40)



SK24 貯蔵穴の半截・遺物出土状況(南西から)



SK3 貯蔵穴の半截・遺物出土状況(南から)



後期末～晩期初頭の注口土器の出土状況(SK24)



後期末～晩期初頭の注口土器の出土状況(SK3)



石棒の出土状況(SG50谷跡)



石棒(写真左)の出土状況(ST40)



関東地方に類似の後期末の注口土器(SK18)



土偶(祭祀具)



矢じり・石やり・石錐・石べら・石さじ(狩猟具・加工具)



くぼみ石・磨石・石皿(粉砕具)



石製品(祭祀・装飾具)



第1次調査の縄文土器の集合



南区の貯蔵穴群の精査状況(北西から)

4 まとめ

作野遺跡は、遺跡範囲の規模やこれまでの調査内容などから、縄文時代後～晩期(約3,000年前)の県内でも有数の拠点集落と考えられています。

今回の調査区は、広大な遺跡範囲の中で、昭和54年の山形大学調査地区、57・58年の第1次調査地区(県教育委員会)と比べ、最も東側の標高が高い扇状地扇頂部でも最頂部付近にあたります。

今回の調査では、南区両端の小谷に挟まれた狭い台地上に、約500年間に渡り十数基以上の多様な貯蔵穴群や、同区南西部では、県内では希少な大型堅穴住居跡(晩期後半)が確認されました。

特記されることは、前回までの調査も含め、これら貯蔵穴群や大型堅穴住居跡の分布状況から、県内では数少ない当時の**集落構成**が把握できることが上げられます。

具体的には、谷に挟まれた扇状地扇頂～扇中部にかけてのやや広い台地上に小型の堅穴住居群(昭和54・58年調査)が配置され、その外側(東側)の土地には、繰り返

返し貯蔵穴を集中して構築している様子が見えてきました。

これは、地下施設である貯蔵穴を、集落内でも標高が高い場所に築くことで、食糧保存のための湿気を防ぐ効果に気付いていたからなのでしょう。

晩期後半(約2,500年前)には、大型の堅穴住居も、標高が高く谷に近い場所に建てられています。住居の床面付近から祭祀具の石棒が出土し、一般住居とは異なる性格もあったのかもしれませんが。

出土遺物では、貯蔵穴の埋没中に完形の注口土器や深鉢が単体で置かれた状態で出土し、祭祀などに使われた可能性も考えられます。

他に関東地方との類似性のある土器が出土し、当時の**広域交流**などがうかがえる良好な資料が得られました。